

「源氏」「夜の寝覚」の番いについて

——『物語後百番歌合』の配列から——

<上>

大 槻 修

序

周知の通り、『物語二百番歌合』は藤原定家の撰、その構成は、大別して『百番歌合』と『後百番歌合』とから成っている。

前者は『源氏狭衣歌合』もしくは『源氏狭衣百番歌合』とも呼ばれ、『源氏物語』の歌百首を左方に、『狭衣物語』の歌百首を右方に配して百番の歌合に仕立て、後者は『拾遺百番歌合』とも呼ばれ、『源氏物語』の歌百首を左方に、『夜の寝覚』以下十物語（夜寝覚・御津浜松・参河細佐介留・朝倉・左毛右毛袖湿・心高幾・取替波也・露之宿・末葉露・海人苺藻）の歌百首を右方に配して百番の歌合にしたものである。

その成立時期について、夙に久曾神昇氏が「建永元年（一二

〇六）春ごろ」と推定されたが、近くは樋口芳麻呂氏の「建久四年（二一九三）秋以降、同七年（二一九六）冬以前の撰、おおよっぱにいうならば建久中期の成立であろう」とする見解が提示された。

ここに「俊成卿女」作と称せられる『無名草子』の成立時期に関する樋口氏の説——正治二年（二二〇〇）七、八月から建仁元年（二二〇一）十一月まで——から、『物語二百番歌合』は『無名草子』成立のすぐ前に成ったことになる。その点、両者のかわり合いの面で注目すべき問題があらうと指摘したところ、改めて樋口氏は、両者の詳細な比較、検討を経て、

俊成卿女は、『物語二百番歌合』の歌人定家の選歌を重んじつつも、否、重んずるが故に、それとは別趣な、物語自

体の批評を『無名草子』で展開したのではなからうかと、傾聴に値する分析を行った。

さて、従来『物語二百番歌合』を対象とした研究のなかで、『本歌合そのものの特質や意義を正面から考えようとする試みは、樋口氏の指摘される通り、ほとんど行われてこなかったといつて過言ではない。いまもからうじて数編に及ぶ樋口氏の研究を参照することとまる状態だが、確かに、本歌合の特質や意義を明確にすることの方が、資料的な利用に先行すべきであり、本稿もまたその趣旨に沿って、特に『後百番歌合』の配列、その中の、『夜の寝覚』の歌を右方とする番いーについて考察することにしたい。

前述の通り、この方面の考究は、先達の樋口氏に負うところ多く、『御津浜松』『みかはにさける』を対象に、すでに論考を発表しておられる点、本稿もまた同氏の方法論に導かれるところ少なからず、多大の学恩を賜ったことを、まずもって断つておきたい。

一
既述の通り、『百番歌合』は『源氏』『狭衣』両物語から、歌

百首ずつを番えた歌合形式と成っているが、部類は、恋部（四十三首）を冒頭に、別部（四番）、旅部（六番）、哀傷部（十五番）と続き、雑部（三十二番）で結ばれており、樋口氏の分析によれば、定家が部立内の歌の首尾の照応や整齊にまで配慮しているという事実が明らかとなった。一方、『後百番歌合』所載の『夜の寝覚』（二番—二十番）の歌の配列と、それに続く『浜松』（二十一—三十五番）の歌の配列とを比較すると、両者の間に大差のあることは、既に広く知られるところである。表1の通り、歌合中の『夜の寝覚』の歌は、物語における歌の掲載順序と無関係に配列されており—対応する『源氏』の歌の場合も、表2の通り、物語中の歌の掲載順序と無関係である—、片や『浜松』では、物語の散逸部分に存して明確ではない二首（二十九・三十番）を除くと、現存物語における歌の所載順に並べられている。

いま『浜松』の場合の歌の配列から、その物語の巻数や巻序についての問題は、久曾神昇・高谷美恵子・松本弘子・伊井春樹・池田利夫・松尾聡・樋口芳麻呂各氏の考察に委ねるとして、その配列方法の差異は確かに注目されるべく、以下、『夜の寝覚』の歌の配列に関する本稿の結論から見ても、

定家は本歌合（私注—後百番歌合のこと）の歌を結番・配列

〔表1〕

夜の寝覚		卷 一			卷 二	中 間	
後百番歌合	a	一・右	五・右	十一・右		三・右	七・右
	b	(風・雑) (2・1321)	(風・雑) (3・1351)			(風・春) (下・87)	
	c	49	84	59		404	405

欠 卷	卷 三	卷 四		卷 五	末尾欠卷
十・右	十二・右	十八・右	四・右	十九・右	二・右
				(風・雑) (3・1373)	
407	411	199	269	316	416

末 尾 欠 卷		末 尾 欠 卷		末 尾 欠 卷	
九・右	十五・右	八・右	十七・右	十六・右	十三・右
(風・秋上) (229)		(風・雑) (2・1270)	(風・哀傷) (613)		(風・雑) (2・1309)
418	418	419	419	419	420

末 尾 欠 卷	
二十・右	六・右
421	421

- 注 1) 上段は「夜の寝覚」の巻別を示す。(5巻本系統に拠る)。
 2) 下段は、a=上段の巻から取られた「後百番歌合」(拾遺百番歌合)の歌の番・左右の別、b=「風葉和歌集」に入集された場合の部立と番号(増訂校本風葉和歌集による)、c=その歌の掲載された日本古典文学大系本の頁(49は同本の49頁を示す)なお中間・末尾欠巻の復原部分は上下2段組みになっているが、そこまでは示さない。

〔表2〕

源氏物語		桐	壺	帚木	空蟬	夕顔	若紫
後百番 歌合	a	十四・左	十六・左				
	b						
	c	①171	①172				

末摘花	紅葉賀	花	宴	葵	賢木	花散里
	七・左	五・左	十三・左	十五・左	十八・左	六・左
	①389	①407	①401	②42	②72	②118

須	磨	明石	滯標	閨屋	蓬生	絵合
一・左	十七・左					
	(風・雑) 2・1278					
②151	②136					

松風	薄雲	朝顔	乙女	玉鬘	初音	胡蝶

蛩	常夏	篝火	野分	行幸	藤袴	真木柱
						二・左
						(風・春上) 36
						③307

梅 枝	藤裏葉	若菜上	若菜下	柏 木	横 笛	鈴 虫
			十一・左			
			④178			

夕 霧	御 法	幻	匂 宮	紅 梅	竹 河	橋 姫
		八・左				十九・左
						(風・雑) 3・1402)
		⑤127				⑤218

椎 本	総 角	早 蕨	宿 木		東 屋	浮 舟
四・左		三・左	十・左	十二・左		二十・左
(風・春上) 21			(風・雑) 1・1204)			
⑤ 251		⑥121	⑥178	⑥183		⑦ 86

蜻 蛉	手 習	夢浮橋
九・左		
⑦138		

- 注 1) 上段は「源氏物語」の巻の名を示す。
 2) 下段は、a—上段の巻から取られた「後百番歌合」(拾遺百番歌合)の歌の番、左右の別、
 b—「風葉和歌集」に入集した場合の部立と番号
 (増訂校本風葉和歌集による)
 c—その歌の掲載された日本古典全書本の分冊と頁 (①171は第1分冊の171頁を示す)。

するに当り、単一の方法を繰り返すのではなく、物語に依り、配列意図に応じて方法を転換する柔軟さ、自由さを保持していたのではないか。⁽¹⁰⁾

と予測する樋口氏の見解は、まことに当を得ているものといえよう。

二

『後百首歌合』の一番から二十番に至る歌の配列について考察するが、引用本文は日本古典文学影印叢刊 14 『物語二百番歌合—奥築和歌集佳切』(昭和五十五年八月、日本古典文学会)に拠る。ただ適宜、漢字に直し、仮名遣いを改めたが、その場合、本文表記を振り仮名の位置にとどめた。また活用語尾等を補った折は、同じく振り仮名の位置に・印を設けた。なお私意に「」や句読点・濁点を付けている。加えて表3を参照されたい。

一番は次の通りである。

一番 左 源氏 右 寝覚

左 須磨の浦にしづみ給ひし頃、八月十五夜くまなき月
に向かひて、都にとまり給ひし人々の御上、過ぎにし

方のことかまくづし思しいで、
見るほどぞしほしなぐまむめぐりあはむ月の都は遙かな
れども

六条院

右 八月十五夜、夢のうちに二年の秋、天つ乙女おり
くだりて琵琶を教へけるを、三年といふ年の十五夜、
雨降り、空くもりて夢も見えずながめ明かして

寝覚上

天の原雲の通ひ路とちてけり月の都人も訪ひ来す

一般に歌合の場合、一番に据えられた左右の歌について、左は右より重んぜらるるわけで、『百首歌合』の場合も、定家が『源氏物語』の歌を左に、『狭衣物語』の歌を右に配したことは、とりも直さず『狭衣物語』の歌よりも、『源氏物語』の歌を優位に置いたことは明白であろう。ただ『後百首歌合』の、一番に据えられた左右の歌の配列を考察する前に、まず『百首歌合』の結番左右に配された歌との関連を追究しなければならぬ。

『百首歌合』百番の歌は

左 六条の院、明石より都にかへり給ひて、初めて内裏
に参り給へりけるに

朱雀院御製

宮ばしらめぐりありひける時しあれば別れし春の恨み残すな

〔表3〕

後百番歌合	一 番		二 番		三 番	
	左	右	左	右	左	右
源氏物語	a	須磨		真木桂		早蕨
	b			(風・春上・36)		
	c	②151		③307		⑥121
夜の寝覚	a		卷一	末尾欠卷		中間欠卷
	b		(風・雑2・1321)			(風・春下・87)
	c		49		416	404

四 番		五 番		六 番		七 番	
左	右	左	右	左	右	左	右
推本		花宴		花散里		紅葉賀	
(風・春上・21)							
⑤251		①407		②118		①389	
	卷四		卷一		末尾欠卷		
			(風・雑3・1351)				
	269		84		421		

七 番		八 番		九 番		十 番	
右	左	右	左	右	左	右	左
	幻		蜻蛉		宿木		
					(風・雑1・1204)		
	⑤127		⑦138		⑥178		
中間欠卷		末尾欠卷		末尾欠卷		中間欠卷	
		(風・雑2・1270)		(風・秋上・229)	(風・雑1・1204)		
405		419		418	⑥178		407

十一 番		十二 番		十三 番		十四 番	
左	右	左	右	左	右	左	右
若菜下		宿木		花宴		桐壺	
④178		⑥183		①401		①171	
	卷一		中間欠卷		末尾欠卷		
					(風・雑2・1309)		
	59		411		420		

十四番	十五番		十六番		十七番	
右	左	右	左	右	左	右
	葵		桐壺		須磨	
					(風・雑2・1278)	
	② 42		① 172		② 136	
末尾欠巻		末尾欠巻		末尾欠巻		末尾欠巻
(風・雑2・1310)						(風・哀傳・613)
420		418		419		419

十八番		十九番		二十番	
左	右	左	右	左	右
賢木		橋姫		浮舟	
		(風・雑3・1402)			
② 72		⑤ 218		⑦ 86	
	卷三		卷四		末尾欠巻
			(風・雑3・1373)		
	199		316		421

注 1) 上段は「後百番歌合」(拾遺百番歌合)の第一番から第二十番までそれぞれ左・右の区別を示す。

2) 中段は、a = 「源氏物語」より取られたそれぞれの歌の所在する巻の名。

b = 「風葉和歌集」に入集した場合の部立と番号(増訂校本風葉和歌集による)。

c = その歌の掲載された日本古典全書本の分冊と頁(②151は第2分冊の151頁を示す)

3) 下段は、a = 「夜の寝覚」より取られたそれぞれの歌の所在する巻を示す。

b = 「風葉和歌集」に入集した場合の部立と番号。

c = その歌の掲載された日本古典文学大系本の頁(49は49頁掲載を示す)なお中間・末尾欠巻部分の復原は上下2段組みになっているが、その区別までは示さない。

右 天稚御子の迎へひなしくかへさせ給ひて

嵯峨院御製

身のしろもわれ脱ぎ着せむかへしつと思ひなわびそ天の羽衣

となつてゐる。百番左は、詞書通り、光源氏が須磨・明石沈淪のあと、暗れて帰京、参内の折に、「いとあはれに、心はつかしう思され」た朱雀帝の詠まれたもの（明石の巻、②—二三）
②は古典全書「源氏物語」の第二分冊、二三三は、その項目番号を示す。以下同然）であり、時しも八月十五夜の「月面白う静かなる」夜のことであつた。

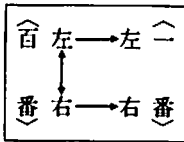
一方、百番右は、狭衣の笛に感銘した天稚御子が天降るが、結局は昇天、代りに、帝が女二宮を狭衣に与える旨を約束する条（日本古典文学大系本、巻一・五〇頁）で、左右ともに帝王の歌、対する相手も、それぞれ物語の主人公（光源氏は進太上天皇として遇せられ、狭衣ものちに天皇になる）である。さらに、共通して両歌とも、帝王が「ある種の後めたさ」でもって相手に対応している場面でもある。ただ右の歌は、八月十五夜ではなく五月雨の空ひつかしき頃、狭衣の笛による奇瑞の夜の出来事を写した場面に記される。

以上、『百番歌合』の百番左右の歌を、『後百番歌合』一番の

左右の歌と関連づけた場合、次のような対応を考えることができよう。

一、百番左の歌と一番左の歌とを比較したとき、前者は光源氏の帰京後であり、後者は彼の須磨・明石沈淪の最中で、それぞれ時期は相前後するが、共通して、ともに八月十五夜の月くまなき頃の描写である。

一、百番右の歌と一番右の歌とを比較すると、楽の音による奇瑞と天稚御子降下を扱った前者に対して、後者もまた、過去二か年、同じく楽の音による奇瑞ともいうべく、天つ乙女の降下を経験した寝覚の上（當時は太政大臣の次女「中君」と称す）が、「今年もまた」と期待する、そこには明らかな共通性を有するといえよう。



ここに結論づければ、『百番歌合』の百番左の歌は、明らかに①須磨・明石沈淪の問題、②八月十五夜の二条件を含んで、『後百番歌合』一番左の歌に投影し、連想が働いているといふべく、同じく百番右の歌は、確かに①楽の音による奇瑞、②天人降下—の二条件を満たして、一番右の歌に投影しているといえよう。（百番右の歌から、一番左の歌への関連

性は、天人一月の都、といった対応も考えられるが、それほど強い投影はみられない。いま図式化すれば、前頁のごとく、藤原定家は、『物語二百番歌合』のうち、『百番歌合』の百番左右の歌を番え、結番したあと、新規にまとめる『後百番歌合』の冒頭、一番左右の歌を番えるに際して、その意図は、両歌合が相互まったく無縁ではあり得ず、明らかに『百番歌合』の百番左から『後百番歌合』の一番左へ、同じく百番右から一番右へと、それは連繋かつ並列的な対応を成さしめる点にあった、といえるのではなからうか。

換言すれば、定家撰になる『百番歌合』の終幕と『後百番歌合』の開幕とは、巧みに照応し合い、また見事に整齊していると考えられるのではなからうか。

三

以上、『百番歌合』の結番を経て、『後百番歌合』一番の左右の歌の配列を検討する。一番左は『源氏物語』須磨の巻から光源氏（六条院）の歌、「須磨には、いとど心づくしの秋風に」を経て、源氏が絵を書きながら無聊を慰め（三三三）、ついで従者と和歌を詠む条の続き。「月のいと花やかにさし出でたるに、

今宵は十五夜なりけり」の優麗な文で始まる、八月十五夜、今年の御遊びを回想する（三五）くだりである。

一方、一番右は、『夜の寝覚』巻一、寝覚の上（中君）の歌。詞書に「雨降り、空くもりて夢も見えずながめ明かして」とあるが、物語本文では、「月ながめて、こと・琵琶弾きつ、格打もあげながら寝いり給へど、夢にも見えず。打をどろき給へれば、月も明がたに成にけり」（引用本文は、日本古典文学大系『夜の寝覚』より。以下同然）とある。なお、この歌は『風葉和歌集』巻十七・雑二（二三二）に、詞書「八月十五夜、年をならべて、夢のうちに、天人の寝覚をしらべけること思ひ出でられて」（引用本文は、『増訂校本風葉和歌集』に拠り、「物語二百番歌合」引用の場合と同じ操作を加えてある）として入集している。そこで一番の番いを考える。

一、前述の通り、『百番歌合』の百番左右の歌それぞれ連想を受けながら、改めて一番左右の歌の詞書に「八月十五夜」という共通性を見出す。

一、加えて両首に、「月の都」とある。もともと左の歌の場合には、「八月十五夜くまなき月」の縁で「月の都」といい、実は「京の都」を指し、右の歌の場合には、文字通り天人降下の一年を引継いで、「月の都の人」（天人）を指す——という違い

はあるが。

一、左の歌は、須磨沈淪の折、廻りくる幸せを願う光源氏の心境であり、右の歌もまた第二年目の八月十五夜、「あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心をみだし給べき宿世のおはするかな」という不吉な天人の予言を抱いての翌年、幸せを願う氣持が寢覚の上になかったとはいえない。

以上の諸条件から、兩首はまさに照応して対等的であり、一般の歌合の場合に准ずるならば、左の歌を右より優位に考慮しなければならぬが、今は一番左→一番右と考えたい。なお、あくまでも、『百番歌合』の百番左右からの連想・対応を無視してはならないであろう。

ともあれ、『後百番歌合』のスタートは、秋は「八月十五夜」、「月の都」なる共通性でもって番えられた。そこには、まさしく藤原定家らしい趣向を読み取ることができるように思われる。定家十九歳の治承四年二月五日から書き始められた日記が、例の有名な『明月記』であることは周知の通りだが、起筆から六日目、二月十四日の条は、

明月無片雲、庭梅盛開、芬芳四散、家中無人、一身徘徊、夜深寢寝所、燈髣髴、胸無付寝之心、更出南方、見梅花、と記され、月光と梅花にあやなされた情景の中に、多感な浪漫

的な文学青年としての彼を眼前に髣髴とする想いがする。

七月十五日、依暑氣上格子、只望明月、終夜無片雲、

九月十五日、甲子、入夜明月蒼然、故鄉寂而不聞車馬之聲、と、月に関する記述は絶えず、また定家の若い時期の歌で特に目立つものは、夜・夢・たそがれの微光・曙の蒼籬・蒼白な月光等を詠んだものだという。「文治三年閑居百首・建久四年六百番合百首・建久七年韻歌百二十八首・建久九年仁和寺宮五十首の中から、春・秋・旅の歌の全部、合計百四十二首を抜き出し、その中にある、この種の美を歌った歌を数へて見ると」として、石田吉貞氏は、

月二四首 夕暮一九首、夜一四首 曙一〇首 夢三百燈二首 夕日一首

といった統計を示しておられる⁽¹⁾。「物語二百番歌合」の成立を建久中期とするならば、まさに定家の青壮年期であり、夢多き詩人の頃であった。『後百番歌合』の一番左右の番いは、文字通り定家の志向に十二分に裏打ちされたものであったといえよう。

なお一番右の歌は、物語開巻筆頭に位し、改作本『夜寝覚』も、この歌だけは改めていない（そういえば、『源氏』『御津浜松』の第二十一番右も、物語の由来を示す重要な歌をとり込んでいる）。

二番は、

左 玉璽たまじの尚侍しょうじ、たまたま参りてやがて出て侍りける
に

冷泉院御製

九重にかすみ隔てば梅の花ただかばかりもにほひ来じとや
右 中宮の御装おんまゐりの時、御腰結おんこしひはせ給ふとて出でさせ給
ひて、上に御対面おんたいめんありしに、内の御気色おんきしよ思し出でて、

女院

君により雲居くもいの人の雲居くもいにて心も空になすを見るかな
の番いで、左は真木柱まぎはしらの巻から冷泉帝れいせんてい（院）の御製である。時
は一月、「月の明あききに、御容貌おんがうたうはいふよしなく消らにて―」で
始まり、月明げいめいの夜、冷泉帝が玉璽の局に渡御する〔三二〕条を
経て、彼女の退出に際し、帝と和歌を唱和する〔三二〕くだり。
なお、『風葉和歌集』巻一、春上（三六）に、詞書「玉璽たまじの尚
侍しょうじ、まかで侍りけるによませ給ひける」として入集している。

一方、右の歌は、物語の末尾欠巻部分から女院にょいん（当時は中宮）
の歌。物語第十六年、主人公たちの第一女、石山の姫君いしやまのひめ（時に
十二歳）の装まゐりが行なわれ、右大臣の妹（姉との説も）の中宮が、
みずから腰結こしひの役に当られた。その時、初めてヒロインと対面
した中宮は、なお彼女を想つて心もうつろな帝の様子を語った。
さて、一番左右の歌との関連をみるに、まず一番左と二番左

との配列を考えてみよう。

一、「八月十五夜くまなき月」（二・左）の頃に対して、季節
こそ違え、冷泉帝と玉璽との出逢いも月明の夜であった（二・
左）。もっともこの符合は、物語本文に即しての理解であつて、
歌合本文の表記上には出てこない。

一、「都にとまり給ひし人々」の上を想い、「過ぎにし方の
こと」に涙ぐむ光源氏の切ない心情（二・左）は、月明の夜、
玉璽との出逢いを、和歌の唱和のみにて別れる冷泉帝の心
（二・左）に相通するものがある。いわば「離別の情」であ
り、ひいては「恋慕」の情でもあろう。

一、当時、光源氏をして須磨に沈淪せしめ、都に残る者を悲
嘆させた―両者を隔てる者（反対勢力）の存在（二・左）は、相
似して、帝と玉璽との間に、敵たる鬚黒すくろくの存在（二・左）があ
つた。

ただ、以上三点の類似は、あくまで『源氏物語』本文の内容
に即してのことだが、前述した『明月記』本文における、月光
と梅花―という定家好みの発想が、一番左から二番左へと継承
されていることだけは注目しておきたい。

ついで一番右と二番左との関連に移る。同じく、季節こそ違
え「月」に関する符合、また天人との別れ（二・右）と、玉璽

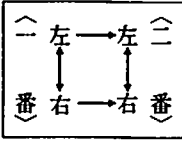
との別れ(二・左)という共通項は見られるものの、両首を結ぶ因果関係は、さほど強いものではない。むしろ一番右と二番右との場合を比べると、「夢のうちに」「天つ(乙女)」「空」「夢」「天の原」「雲の(通ひ路)」「月の都の人」といった語(一・右)に対して、「雲居の人」「雲居」「心も空に」(二・右)という連想の働く語の表記に気づく。

こうした見方が許されるならば、『源氏物語』本文の内容に即して、一番左から二番左が導き出され、一方、連想の働く語の表記から、一番右→二番右という方向が考えられる。ここで、二番左右の関連を調べる。

一、表記上は、「九重」「かすみ」など(二・左)に対して、「雲居」「心も空に」(二・右)と、類似している。

一、月明の夜、玉燵によせる冷泉帝の恋慕の情である(二・左)に対して、女院の詠ではあるが、寝覚の上によせる冷泉帝の、同じく恋慕の情を読み取ることができる(二・右)ことは共通しているであろう(ともに、時に冷泉帝であった)。

一、冷泉帝と玉燵との間に、鬚黒が控え(二・左)、同じく帝と寝覚の上との間には、



ヒーローの内大臣が存在する(二・右)。

以上の三点を考えるに、二番左右の番いは、一概に、左→右またはその逆といった一方通行を取るよりも、むしろ相互に深い因果関係を持つとして、左↑右といった照応関係と見ておきたい。

ここに、一番左右から二番左右への展開は、上段の図のような方向を考えてよいのではなからうか。

四

三番左右の番いにはいる。

左 姉の女君かくれてのち、二条院にうつろひ給はむこと明日とて、右大將、宇治にもし給へるに、軒近き紅梅の色も香もいとなつかしきを、鶯さへ過ぐしがたくうち鳴きて渡るに、春や昔のと、いとど心にあまりて 兵部卿宮の上

見る人もあらしにまよふ山里に昔おぼゆる花の香ぞする
右 広沢に一人ながめて、姉の上もろともに、起き臥しなれにし方を思ひ出で給ふにも、春や昔のとのみしのばれて

咲きにはふ花も霞ももろともに見しならなる春の曙。

左の歌は、早蕨の巻、兵部御宮の上(當時は「中君」の時代)の歌。匂宮の要請を受けて中君上京、その前日、薫は宇治を訪ねる。上京の苦衷を訴える中君に、心を抑えて対面した薫(二・三)は、庭前の紅梅を前にして和歌を唱和する(二四)条である。

一方、右は中間欠巻部分に位置する寝覚の上(當時は「中君」の時代)の歌。物語第六年、彼女十八歳の春、仲睦まじかった姉大君のことを思い出し、身の不幸を嘆き暮らす日々(物語本文に「いにしへ西山にて、見しながらなる、とながめし程のなげかしき、身の有さま」(巻四・二六八頁)とある)の詠である。なお『風葉和歌集』巻二、春下(八七)に、詞書「広沢に住み侍りける頃、朝ぼらけの空の気色にも、見し世のほど思ひ出でられければ」として入集、ただ第三句「みやこにて」とする。まず、二番左と三番左との関連を見る。

一、「かすみ隔てば梅の花」にほひなどの語(二・左)に對して、「軒近き紅梅の色も香も」花の香ぞする(三・左)とあり、また「梅」の縁で「鶯」など、密接な関係を保っている。一、玉璽と出逢ったのち、和歌の唱和にて別れる冷泉帝の慕情と別離の情(二・左)と、庭前の紅梅を前に、薫と和歌を唱和する中君の慕情と別れの心情(三・左)とは、ともに共通性

を持つている。

一、冷泉帝と玉璽との間を隔てる鬚黒の存在(二・左)と同じく、薫と中君との間には匂宮の存在を忘れ得ない(三・左)であろう。ここに二番左→三番左という方向づけは可能と考えられよう。

ついで、二番右と三番左との関連だが、確かに、寝覚の上によせる冷泉帝の「心も空」なる思慕の情(二・右)と、上京を前に薫と別れる中君の胸に秘めた慕情(三・左)と、相似してはいるものの、両歌対応の因果関係は至って薄いものであり、加えて二番右と三番右との対応も考えなくて宜しかろう。最後に三番左右の番いを検討する。

一、詞書にある「春や昔の」(三・左)は、物語本文に、「御前近き紅梅の色も香もなつかしきに、鶯だに見慰しがたげにうち鳴きて渡るめれば、まして春や昔のと、心をまどはし給ふどちの御物語に」とあり、詞書部分は、その巧みな要約となっている。ならば、三番右の場合も、詞書は、いまはなき中間欠巻部分の該当本文を、同じく巧みに要約しているのかも知れない。ついでに物語本文に「春や昔のとのみ」といった語が表記されていたとも考えられよう。

一、「紅梅」鶯「花の香」など(三・左)に對する「咲き」

にはふ」「花も霞も」(三・右)と、梅・桜の違いこそあれ、相似する。

一、「見る人もあらしに」(三・左)の「嵐」は「(嵐)にまよふ山里」への連想から、嵯峨は広沢に淋しく日を送る中君(三・右)の心情に思い至るのではなからうか。

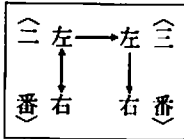
一、亡き姉大君を慕う中君の心情(三・左)は、親しくしてきた姉大君を思う寢覚の上の心(三・右)に通じるものがある。また両歌とも「中君」時代のものであった。

一、匂宮の要請を受けて上京する中君の心情の奥には、薫と別れる切ない思慕の情があった(三・左)ように、ここ広沢で姉を思う中君の心の奥底には、徐々に芽生える義兄(当時は大納言)への恋情があった(三・右)、と考えられないだろうか。

中間欠巻部分として物語本文は欠落しているが、男君の殺父左大将(のちの老関白)との結婚問題が起きる前、

すでに彼女の心中には、義兄への思慕の念が湧き始めており、それが左大将との婚姻の件で、一挙に大きく吹き出してしまったように思われる。

以上の諸点から、三番左——右の対応は動かしがたく、ついでには二番左右から三番左



右に関する対応は上図のような方向をたどるのではなからうか。つきに四番左右の番い。

左 兵部卿の宮、初瀬に詣で給ふ宇治の御なか宿りに、

あそびし給ふもの音ども、追風に吹き来る響を聞

きて、右大将のもとにつかはしける。 第八親王

山風に霞ふきとく声はあれど隔てて見ゆるをちの川浪

右 春の曙、衛門の督の上もろともにながめ明かして

朝ぼらけ憂き身かすみにまがへつついく度春の花を見るら

む

左の歌は、椎本の巻から八宮の歌。匂宮の初瀬詣での帰途を、夕霧は、宇治の山荘に迎えようとし(二二)、やがて葉の窠、八宮は遙かに川面を伝う音色を耳にして、懐旧の念から薫に消息する(五)くだり。物語本文に、「はるばると霞み渡れる空に、散る桜あれば今開けそむるなど、いろいろ見渡さるるに」とあり、また『風葉和歌集』巻一、春上(二二)に、詞書「匂兵部卿のみこ、初瀬詣でのかへさに、宇治にとどまりて侍りけるに、もの音ども追風に吹きくるを聞きて、薫大将の侍りけるに、つかはしける」として入集している。

一方、右は巻四、寢覚の上の歌。物語第十五卷、いわゆる帝関入事件のあと、内大臣の援助もて宮中を脱出した彼女は、

久方より宰相中将の上(老閨白の残した義理の次女)と語り明かさんとする。片や、女一宮の許に帰った内大臣は、寝覚の上恋しさに来訪、出逢いを断った彼女は、宰相中将の上と、互いの不幸な身の上を嘆く。物語本文に、「端にいざりいで給つれば、名にながれたるあけぼのの空かすみわたり、いま開けそむる花の木末ども、似る物なきほどなるに……うちながめ給へる朝顔の花の木末も歯のただすまひも、うつらず、めでたうのみ見え給を」とある。三番左と四番左とを比べると、

一、ともに舞台は宇治。

一、中君の上京は、物語本文に「二月の朔日頃とあれば」と記され、また匂宮の初瀬詣では、同じく「二月の二十日の程に」とある。

一、それは、微妙な季節の推移によって、「紅梅の色も香も」「花の香ぞする」(三・左)から「霞み渡れる空に、散る桜あれば今開けそむる」(四・左)に關する物語本文より)に移行する。

一、「昔おぼゆる花の香ぞする」(三・左)から、姉大君存命の頃、ひいては姉妹の幸せを願った父八の宮(四・左)へ、と回想は深まる。

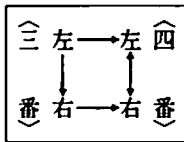
といった関連を見出し得よう。つきに三番右と四番左の対応を見ると、「春や昔の」「咲きにはほ花も霞も」(三・右)に対し

て、「山風に霞ふきとく」(四・左)とあるが、その共通項は他の場合と比べて薄いといえよう。むしろ、三番右から四番右への場合、

一、「春や昔の」「花も霞も」「春の曙」(三・右)に対応して、「春の曙」「かすみにまがへつつ」「春の花」(四・右)とある。

一、物語本文を見るに、中間欠巻部分での三番右の情景描写を継承して、物語は巻四において、「いにしへ西山にて、『見しながらなる』と、ながめし程のなげかしき、身の有さま」と表記され、四番右の歌にはいる。こうした物語展開上の密接な対応も注目されて宜しかろう。

以上の諸点から、三番右→四番右への発展は強いものがあると考えたい。最後に四番左右の番いを見るに、「霞」という語について、両者の表記および両者に關する物語本文の表記に



共通性を持つが、それ以上のものではない。

ここに三番左右から四番左右への対応を考えるに、確かに三番左から四番左への連想も無視し得ないが、一番強い連想のカギは、三番右から四番右に秘められているのではなからうか。三番右の歌の結局「春の曙」が、四番右の詞書に直接結び付けられ、

「見しながらなる」の語の連係によって両首は密接な関係にある。それに比べると、三番右から四番左への展開は、さほど考慮に値しないのではなからうか。一応前頁の図のような展開を記しておきたい。

五

五番左右を見る。

左 弘徽殿のおぼろ月夜ののち、右の大臣の、藤の宴の夜おはして、尚侍の寄り居給へる戸口に訪ねより給

ひて

あづさ弓ゆみいるさの山にまどふかなほの見し月のかげや見ゆると

右 九条の旅たび寝ののち、后の宮に召し出だされたるを、ねむごころに語らひつつ、かの御行方たづね給ふこと度

かさなれば、思ひわびて

女院新少将

こさかへり同じ漆うるしに寄る舟の渚なぎさをそれと知らずやありけ

左の歌は花宴の巻、源氏の歌である。観桜の宴が催されたその夜半、源氏は弘徽殿の細殿で臘月夜の君と出逢つて、扇を与え

て別れた(二)が、以後、女の種姓しゅせいを探索せしめ、右大臣邸の藤の宴にて、再び彼女と逢うを得た(六)条で、源氏が「おしあてに」几帳きちょうごしに女の手をとらえ話しかけたところ、「心いる方ならませば」と答えた声、「ただそれなり。いとうれしきものから」と物語本文にある。

一方、右の歌は、巻一、新少将(但馬守の三女)の詠。九条での夢のような一夜以来、男君(当時は権中納言)は、当の相手を但馬守の三女と誤認し、中宮のもとに出仕せしめたところ人違いと知つて驚く。ある雪の夜、彼女のもとを訪ね、実は一夜の女が、新妻の妹中君であると知らされ、男君は衝撃を受ける。なお「風葉和歌集」巻十八、雑三(二三五)に詞書「閨白、入道太政大臣の姉女にすみわたりにけるに、その妹をばやう見侍りけるを、誰とも知らで、行方聞かせよと責め侍りければ」として入集、初句「こさかへし」、結句「しらすや有けん」。ま

ず四番左と五番左を比べると、
一、句宮の初瀬詣では二月二十日の頃、対する南殿の観桜の御宴が、同じく二月二十日あまりの日、ついで右大臣邸の藤の宴が三月廿日余日、と物語本文にある。

一、「はるばると霞み渡れる空に、散る桜あれば今開けそむるなど」と、宇治の宴は記され、その縁から連想は観桜の宴、

おぼろ月夜―に及んだものか。

一、薫との出会いを期待する八宮(四・左)に対応して、随月夜の君との再会を願った源氏の心中(五・左)。

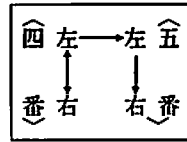
といった関連を見ることができよう。四番右と五番左に関し
ては、花・月の縁はともかくとして、深い対応は認められない。
一方、四番右と五番右とを比べると、これまた対応は認められ
ない。最後に、五番の番いを見ると、

一、扇を交した相手を探し求める源氏が、推し当てに詠みか
け、その結果、随月夜の君なることを知った経過(五・左)に
対して、新少将を相手に、一夜の女の素性を聞いたした男君
が、なんと新妻の妹なるを知った場面(五・右)は、みごとに
両者よく対応している。

一、光源氏が、やがて須磨・明石に沈淪する口火となった事
件(五・左)と、片や同じく、男君が運命にあやつられた悲恋
に落ち込む事件(五・右)と、ともに相手の確認は、運命に翻
弄される不幸な出来事の察あけであった。

一、「(「いるまの」山」(五・左)と「同じ」深に」(五・右)。
山と海の対応も楽しい。

などの共通点を見出し得る。以上、四番と五番との配列を分
析すると、四番左から五番左への連想の働きを認め得ると同時



に、五番左―同右の対応も非常に強いものがあり、物語展開の上から、見逃し得ないものがあるといえないだろうか。一応、上の図のような対応を示しておきたい。

六番は、

左 故院かくれさせ給ひてのち、麗

景殿の女御の御もとにまうで給へ
るに、軒近き橋に時鳥の啼きければ

橋の香をなつかしみ時鳥花散る里をたづねてぞ訪ふ

右 暁しのびたる所より帰るとて、冷泉院の左の大臣の

女御の御もとにまうで給へるに、朝またき、行き来の

道の便りにもすぎぬ心はうれしかりけりと侍りければ

右大得まさこ君

玉ぼこの道ゆきずりの便りにも訪ふべき宿はさしてこそく
れ

である。左は、花散里の巻から源氏の歌。五月雨のころ、花散
里のもとを訪ねた源氏は、橋の香匂う旧邸の西面にて歌を交し、
その足で彼女の姉に当る麗景殿女御と逢う。桐蔭院崩御のあと、
源氏の世話になっている女御は、年こそ取れ、あてにろうたげ
なお人柄であった(五)という。

右は、末尾欠巻部分から、まさこ君の歌。いわゆる「まさこ勘当事件」のあと、警戒を厳にされた冷泉院は、女三宮を連れて大内山に籠ってしまふ。里下りの侍女、中納言の君を訪ねたまさこ君は、女三宮への絶望的な気持を訴えた。時に初夏、時鳥や蛙の鳴く頃、女三宮も同じく大内山で悲嘆の毎日。さて、中納言の君を訪れた帰途、まさこ君は宣耀殿女御（冷泉院の左大臣の女御）の許を訪れて歌の贈答をする。折から藤の花の「松の末より木高く咲きかかりたる」〔寝覚物語絵巻〕本文より姿は美しかった。例によつて、五番左と六番左とを比べてみよう。

一、ともに光源氏の歌。

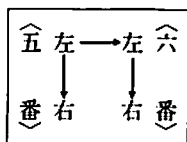
一、観桜の御宴（三月二十日余日）から藤の宴（三月二十日余日）に至る（五・左）時の推移から、麗景殿の女御を訪れたのは五月雨の頃（六・左）となっている。

一、「藤」と「時鳥」の縁は、「わが宿の池の藤波咲きにけり山時鳥いつか来鳴かむ」（古今集・巻三・夏）を引くまでもなく、古来よく詠われ、また定家の撰した『百番歌合』の右方『狭衣物語』の冒頭部分には、「中鳥の藤は、「松にとのみも」思はず咲きかゝりて、山ほとゝぎす待顔なるに」（日本古典文学大系本に拠る）との有名な一節がある。

一、一カ月ぶり、推し当てて尋ねた相手を臘月夜の君と確認

した源氏は、まさしく「昔の人の袖の香ぞする」（古今集）との連想から、「五月まつ花橘の香」をなつかしむ六番左の詠に導かれたと考えられよう。つまり五番左——六番左の関係は密接なものがある。

五番右と六番左との関連は、一応、「昔の人の袖の香ぞする」の縁にて、九条の一夜の女を新妻の妹と知つて、過ぎし目を懐しむ情（五・右）が、「（花）橘の香をなつかしみ」の詠に連



想が働いたとも考えられなくはないが、さほど強い共通性はなからう。五番右と六番右とは、対比すべき内容はないように思われる。最後に六番左右を検討すると、

一、源氏が、花散里を訪ねたその足で姉の麗景殿女御の許に伺つた（六・左）のに對して、まさこ君も、中納言の君を訪ねた

帰途に、宣耀殿女御の許に来ている（六・右）。

一、時は同じく時鳥の鳴き、藤の花の美しい季節（寝覚物語絵巻の本文）であり、「五月まつ花橘の香」を懐しんで、源氏は「（花散る）里をたづね（六・左）、麗景殿女御と、またまさこ君は、「訪ふべき宿」を自指して（六・右）、宣耀殿女御と歌を交し合つた。

以上の経過を図式化すれば、上掲の通り、五番左から六番左への連繋があり、その六番左から、同右に反映したものと考え、て宜しかろうかと思う。

注

- (1) 久曾神界氏「物語二百番歌合と研究」(未刊国文学資料、第一冊 第一冊、昭和三十年十二月刊)の解題
- (2) 樋口芳麻呂氏「松浦宮物語」「物語二百番歌合」の成立時期について(「国語と国文学、昭和十五年五月特集号」)
- (3) 樋口芳麻呂氏「袋草紙・無名草子の成立時期について」(「国語と国文学、昭和四十五年四月号」)
- (4) 拙稿「物語評論と『物語二百番歌合』」(日本古典文学影印叢刊 月報十四、昭和五十五年八月、日本古典文学会)
- (5) 樋口芳麻呂氏「物語二百番歌合と無名草子」(「国語国文学報、第三十八集、昭和五十六年三月」)
- (6) 樋口芳麻呂氏「源氏狭衣百番歌合の配列について」(「文学・語学、第五十七号、昭和四十五年九月」)
- (7) 樋口芳麻呂氏「平安・鎌倉時代散逸物語の研究」(ひたく書房、昭和五十七年二月)。なお前出の同氏論文は、すべて本書に再録されている。
- (8) 注7参照。
- (9) 久曾神氏から松尾氏に至る考察の紹介と要約、また樋口氏の研究は注7に詳しい。
- (10) 注7参照。
- (11) 石田吉貞氏「藤原定家の研究」(文雅堂書店、昭和三十二年三月)

なお本稿の下は、「甲南女子大学研究紀要」第二二輯(昭和六一年三月刊)に掲載した。併せてお読み戴ければ幸甚である。

訂正 国文学解釈と鑑賞別冊「日本文学新史 中世」(昭和60・12月刊、至文堂)の拙稿「第四章 王朝物語よりの流れ」の「栗栖野物語」に関する記述(同誌94頁、下段の五行分)を、次のように改める。

『栗栖野物語』は、始めに伊井春樹氏によって学界に紹介された(同「栗栖野物語」文献50)が、近時、田辺俊一郎氏によって、この物語は「錦木物語」(松本家至「錦木物語」『古典文庫』文献17)の下巻に相当することが発表された(同「にしき、ものかたりとその異本」文献51)。ひいては、成立年代を江戸前期かとする向きもあり、今後の考究にまつところが多い。従って、引用文献の欄(同誌316―318頁)も、つぎのように追加しておきたい。

文献50 栗栖野物語 伊井春樹 国文学研究資料館紀要 昭
54・3
文献17 古典文庫「錦木物語」 松本家至編 古典文庫 昭
48・7
文献51 「にしき、ものかたり」とその異本―『栗栖野物語』
本文との比較考察― 田辺俊一郎 二松学舎大学人文論叢第
30輯 昭60・3
なお、拙稿本文中の文献番号と引用文献欄に掲載の文献番号との間に異同があり、改訂方を依拠しており、その折に本文とともども是正したい。 大隈